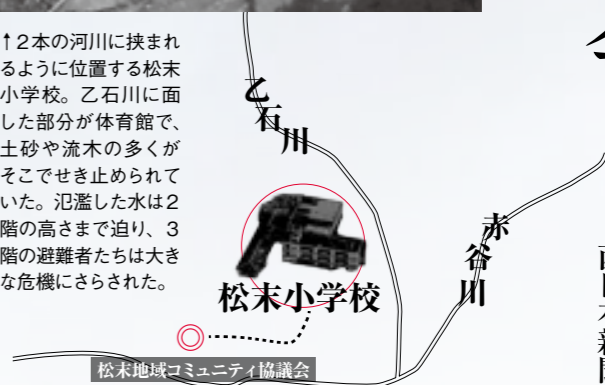


# 孤立した校舎で

校舎を囲む2河川の氾濫で孤立した松末小学校。逃げ場をなくした避難者が生死の危機に直面した夜、西日本新聞・中川記者の実体験からその恐怖をたどります。



↑2本の河川に挟まれるように位置する松末小学校。乙石川に面した部分が体育館で、土砂や流木の多くがそこでせき止められていた。氾濫した水は2階の高さまで迫り、3階の避難者たちは大きな危機にさらされた。



↑5日の豪雨当時の校庭と(左)翌朝の状況(右)。車両が土砂で埋め尽くされ、崩落した崖の様子が確認できる。(写真提供:西日本新聞社)

## 取り残された校舎で 死の恐怖迫った一夜

「朝倉では100ミリの雨が降ったようだが、様子はどうか」本社からの連絡を受け、当時西日本新聞朝倉支局長だった中川次郎記者は現場へ向かいました。

「地域のかたと、『5年前とどちらがすごいですか』、など話したのを覚えていますが。まだ余裕があったのかもしれない」。しかし予想を超える豪雨に逃げ場を失い、松末小学校へと非難。水かさ2階にまで達し、校舎の3階で大人から子どもまで約50人が孤立しました。「子どもたちが『白い車が流されている、人が手を振っていた』と声をあげたが、



西日本新聞社 筑豊総局  
中川次郎 記者

何もできない。空腹などは全く感じなかった。死ぬかも知れない、本気でそう思いました」。

極限の状況下でも、報道の責任を感じていた中川記者。「周りの人の電話は充電が切れ、私も仕事のために機器の充電は残しておきたかった。それでも業務用パソコンを開き、雨雲の動きを調べました。状況を知れば、周囲を励ませると思っただけです」。岩や木々のこすれ合う音、鳴り響く雷鳴、バケツをひっくり返したような雨の轟音。停電した暗闇で「もう少し、あと少し」と時が過ぎるのを待ち続けました。

## 命を守る。そのために

### 幸運重なった危機からの脱出 雨で死ぬことを実感

「もし体育館がなかったら」――翌日、流木と土砂をせき止めた体育館を見て中川記者は言葉を失いました。昨日とは一変した風景。現実とは思えないその光景に誰もが立ち尽くす中、伊藤会長は全員を鼓舞し、歩ける人から避難所行きバスへ徒歩で向かいました。その道のりは、地元消防団らにより土砂が取り除かれており、疲れきった中川記者ら避難者は迎えられました。



↑バスに向かわず松末小に残った避難者も、到着した消防隊員によって無事全員が救助された。

「あの時、誰もが被災者でありながらお互いに助け合い、支え合いました。そのことで多くの命が救われたのは間違いありません。孤立した私たちはなすすべも無く、救助を待つしか無かった。助かったのは幸運でした。そうならないためには、手遅れになる前に逃げるしかありません。取材した人や顔見知りも命を落とした。『雨でも人は死ぬ』ということを実感しました」と中川記者は振り返ります。

↑土砂と流木が流れ込んだ体育館(上)と校舎(下)。体育館がせき止めなければ、校舎も危険にさらされていた。



## 災害時に分かりやすい指標を内閣府が設定 防災情報に「警戒レベル」を新設

災害時に気象庁や公共機関が発信する情報に、5段階の「警戒レベル」が追加されました。今後は防災無線やエリアメールによる警報発令時は「警戒レベル4、避難開始」などレベルと避難情報が発信され、状況がより把握しやすくなります。災害時は情報が最も重要。早めの避難を心がけましょう。

警戒レベル	避難情報・とるべき行動
警戒レベル5	<b>災害発生情報</b> すでに災害が発生している状況であり、命を守るための最善の行動が必要。
警戒レベル4	<b>避難勧告 / 避難指示 (緊急)</b> 災害の可能性が極めて高く、立ち退き避難を基本に行動する。困難な場合は近隣や建物内の安全な場所へ緊急避難。
警戒レベル3	<b>避難準備・高齢者等避難開始</b> 避難に時間のかかる人は避難開始。危険を感じた場合は自発的に避難する。
警戒レベル2	<b>注意報</b> ハザードマップ等による避難場所や経路の確認・注意を行い、避難に備える。
警戒レベル1	<b>警報級の可能性</b> 防災気象情報の等の最新情報に注意を向け、災害への心構えを高める。

## 一人の記者として 伝え続ける命の重み

無事に帰宅した翌日から現場へ向かったという中川記者。「実は筑豊への転勤が決まっていたのですが、会社にかけあい3か月残留しました。この災害を伝える義務があると思ったからです」。1週間以上休まずに、深夜まで被災地の実情を発信し続けました。「『いい経験をしたね』と言われたこともありますが、そんな必要は絶対にあります。体験した人とそう



↑被災直後、黒板に残る浸水の跡。現在廃校となった松末小では、多くが当時ままの状態が残っている。

でない人ではどうしても温度差がある。記者として、一人の被災者として、その差を埋めていきたい」と力を込めた中川記者。朝倉市を離れた今も定期的に豪雨関連の記事を書き、警鐘を鳴らし続けています。